

農林水産大臣賞受賞

「私たちと笑顔つなぐ里山に…」ここに日本の原風景がある
～景観と芸術による美しいむらづくり～

受賞者 ^{うすねちいき} 薄根地域ふるさと ^{そうせいすいしんきょうぎかい} 創生推進協議会
(群馬県 ^{ぬまたし} 沼田市)

■ 地域の沿革と概要

薄根地域ふるさと創生推進協議会（以下「協議会」という。）が所在する群馬県沼田市は、群馬県北部に位置する人口約4万5,000人の中核都市で、市の周囲は赤城山・武尊山・皇海山・袈裟丸山などの山々に囲まれた山岳地帯で、標高は250mから2,000mと起伏に富んだ地形をしており、本市の約8割を森林が占めている。

市内には国内有数の河岸段丘等、スケールの大きく変化に富んだ自然環境が存在し、市の南北を貫くように利根川やその支流である片品川・薄根川が流れており、豊富な水資源が首都圏の水がめとして重要な役割を果たしている。

東京からは約125kmの距離があるが、上越新幹線や関越自動車道沼田IC、国道17号線等の交通網が発達しているため、JR東京駅からJR沼田駅まで約150分、関越自動車道を利用すると練馬ICから約90分など、首都圏を含む全国からのアクセスが容易な地である。

気候は比較的降水量が少なく、夏冬・昼夜の寒暖差の大きい内陸性気候に属し、りんご・ぶどう・さくらんぼなどの果樹やレタス・大根・はくさいなどの野菜の栽培地であり、首都圏の食糧供給基地となっている。

市中心部の薄根地域の歴史は古く、かつては中世の豪族沼田氏の居城、沼田城の城下町として栄えた。戦国時代には、上杉家や武田家、北条家といった当時の有力大名が領有を巡って対立していた要衝の地でもあり、16世紀後半からは真田氏が治世していたことでも有名であることから、本地域では、歴史的建造物などの文化財が点在し、史跡巡りも楽しめる農村地域でもある。

本協議会の活動区域である石墨集落は、関東百名山のひとつ、標高1,122mの三峰山の麓に広がる農村地域で、集

第1図 位置図

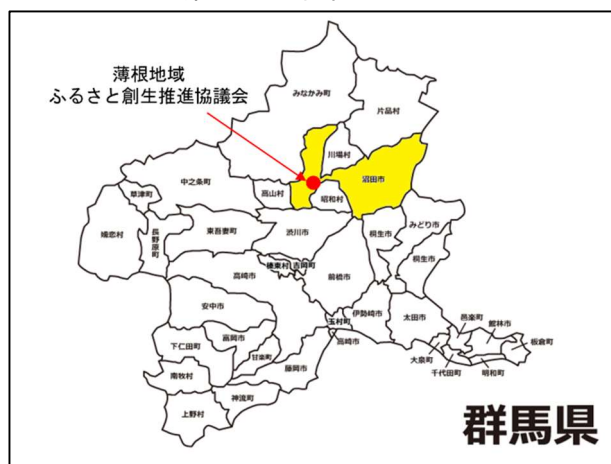


写真1 石墨地区の全景

落の近くを四釜川が流れる自然豊かな環境にあり、先人たちは、冷え固まった溶岩が点在する斜面に水田を築くため、ダイナマイトを扱う知識と技術を身につけ、大きな溶岩を砕き、それを積み上げることで開墾を進めたといわれている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

本協議会のある旧薄根村地域・石墨西地区は、少子高齢化の進行により、集落としてのコミュニティ機能の低下が深刻なものになっていたため、集落の住民が中心となって話し合いを重ね、耕作放棄地の開墾を端緒にして目に見える地域環境の改善に取り組んだ。そうした話し合いを始めてから短期間で、多くの地域住民や団体とコミュニティ機能の再生に向けた連携体制を構築し、棚田を生かした都市農村交流の促進の他に、地域の小中学校との里山の生態系を保全する活動を通じた地域コミュニティの活性化や、地域内外の若者へ地域の魅力を再発信することで後継者の確保にも寄与するなど、総合的なむらづくりが行われてきた。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落
組織の性格	地縁的な集団等
人口等	総人口 45,537人 総世帯数 18,853戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 940経営体 個人経営体数 915経営体 団体経営体数 25経営体 (内、法人経営体数) 25経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 44,346ha 耕地面積 3,110ha 田 762ha 畑 2,350ha 耕地率 7.0% 一経営体当たり耕地面積 3.3ha

※四捨五入のため、計と内訳が一致しない場合がある

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

古くは林業・養蚕・稲作で栄えていた石墨集落は、近年、少子高齢化の進行によって人口減少が進み、空き家や耕作放棄地が目立つようになり、消防団や育成会などの「役員の受け手がいない」、「一人が複数の役を兼務している」など、地域のコミュニティ機能の低下が現実のものとなってきた。

特に、石墨棚田のある石墨町（西）区では、平成29年には総世帯数37世帯のうち、子供のいる世帯が1世帯となり、若年世代の人口流出によって行政区の存続が危ぶまれていた。

こうした状況の中で、危機感を共有した仲間から、「地域住民に元気があるうちに地域の活性化に取り組もう」という声がかきかけとなり、集落の財産である棚田を活用した地域おこしを検討することになった。平成29年7月には薄根地区振興協議会役員会の下に「薄根地区未来委員会」を設置し、沼田市の出前講



写真2 協議会の設立総会の状況



写真3 活動拠点「くわのみハウス」

座を開催し、当地区の現状分析と将来展望等薄根地区の活性化策について検討を進めた。

この活性化策の中で「石墨の棚田は景観もよく、かつてはホテルも飛び交っていた。交流人口を呼び込むことができるのではないか」、「当地区は過疎化が進む集落でもある」といった意見を踏まえ、薄根地区振興協議会では、「石墨棚田の再生とホテルの復活」をスローガンに掲げ、地域活性化事業の推進組織として、平成 30 年 4 月に N P O 法人「沼田未来の会」を設立した。

N P O 法人沼田未来の会の活動の中で、「更なる地域活性化のため、様々な団体や個人の力を結集しよう」ということになり、同年 12 月に本協議会が設立された。



写真 4 棚田の再生作業

(2) むらづくりの推進体制

協議会の組織体制は、構成員として農泊事業や体験事業を実践している個人・団体、地域の農泊事業を推進する個人・団体に加え、構成員の推薦によって新たな構成員を加入させることも可能としている。

構成員の現状は、集落住民を中心に、行政機関、地域おこし協力隊、地域の農家民宿・民泊事業者・農業体験実践者に加え、地域内外の様々な特技を持った住民が参加するなど、多種多様となっており、協議会の役員は現在 24 名である。

協議会では毎月 1 回定例会を開催し、活動状況（先月の活動の総括、当月の活動内容等）の確認や、大きなイベント開催時にはイベント会議を開催し、具体的な役割分担の確認に加え、イベント後に実施するアンケート調査の内容等の検討も行っている。

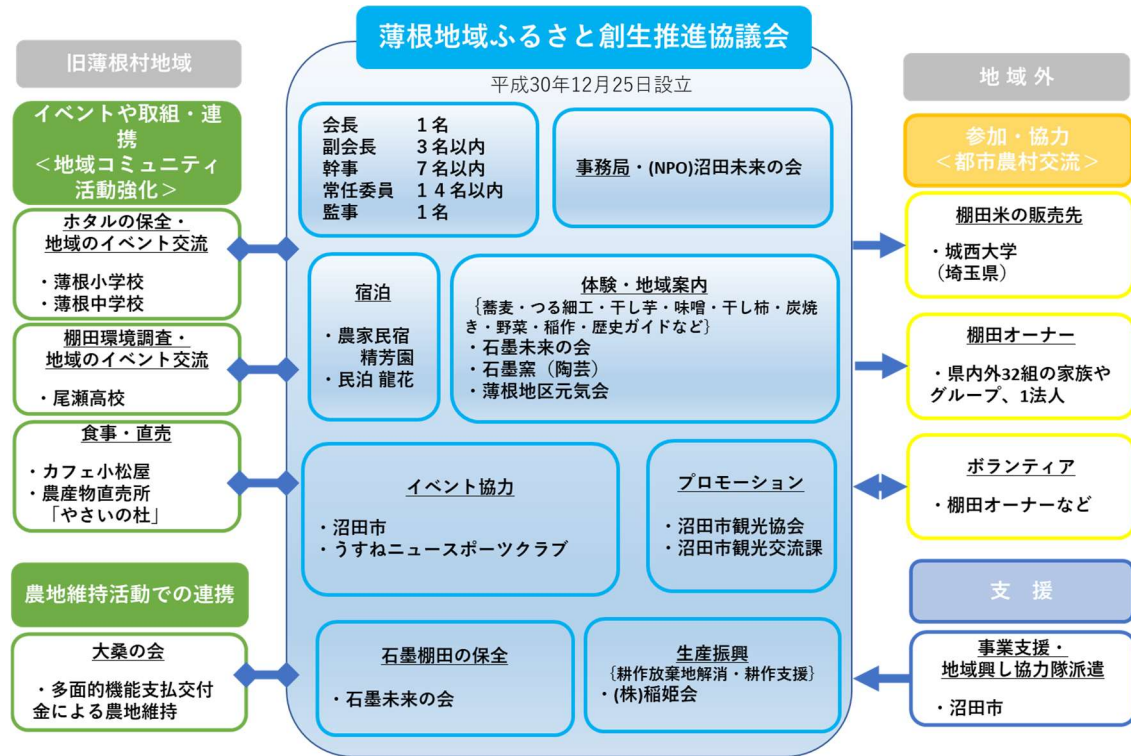
主な構成員は、N P O 法人沼田未来の会、石墨未来の会、薄根地区元気会、株式会社稲姫会、農家民宿農泊「精芳園」、民泊「龍花」である。

その他の組織、団体及び行政との関係は、連携してむらづくりを行う組織等として、各種事業に対する支援を行っている沼田市、カワニナ養殖や棚田イルミネーションなどに参加している沼田市立薄根小学校、棚田イルミネーションに参加している沼田市立薄根中学校、棚田の環境調査を実施している群馬県立尾瀬高校、棚田米を販売している城西大学、来場者の案内や地域の農産物を販売している農産物直売所「やさいの杜」がある。

また、石墨西集落を含む薄根地域（旧薄根村）の集落住民についても、上記の団体への参加の他に、多面的機能支払交付金や中山間地域等直接支払交付金による農地や農業用施設の維持活動を通して、石墨西集落の棚田の保全を担っている。

さらに、多面的機能支払交付金により活躍する団体で連携団体である大桑の会には 163 世帯が参加しており、東石墨集落の会員が中心となって、協議会とともに石墨町の草刈や竹林の整備を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

本協議会は、棚田オーナー制度・各種体験事業を活用した都市農村交流、棚田の景観の復活と里山の自然環境の保全、学生等と連携した生態系の保全と学習機会の創出、棚田を活かした観光地づくりなどに取り組んでいる。

各種の取組は、都市農村交流や環境保全を充実させるための人材育成、将来に向けた目標を明確化するとともに、地元住民と都市住民、棚田の保全活動に共感した多くの関係者との連携により進められている。こうした取組の推進により、農地の保全、農業や農村の多面的機能や農村文化の伝承、更には小学生・中学生の活動による農村への理解の醸成や関係人口の増加にも繋がっている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 棚田オーナー制度

棚田オーナー制度は、年4回の農作業体験（田植え、観察会、稲刈り、収穫祭）を行うもので、令和4年度の募集では26組のオーナーが参加し、耕作放棄地約26aの再生に寄与している。

令和元年度の制度開始から延べ59組のオーナーが参加しており、特に首都圏（東京都、埼玉県）からの参加が約6割を占めるなど、都市住民と地元住民との交流が促進されるとともに、近年は新しいオーナーに先輩オーナーが農作業を教えるなど微笑ましい様子も見られるようになっている。

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、田植えの様子をwebでライブ配信する「リモート田植え」を実施して、交流を継続した。

さらに、令和5年度からは新たに法人オーナーが誕生し、コロナ禍で減った社員同士のコミュニケーションの場ともなり、こうした企業とのコラボも地域貢献に繋がっていくと考えている。



写真5 リモート田植えライブ配信

(2) 野菜・果樹収穫体験事業

棚田オーナー制度参加者を対象に、地元の農家をお願いして、サツマイモやリンゴの収穫体験を行っており、体験参加者が地域で生産された野菜や果樹等を購買することによって、生産農家の売上に寄与している。

地元農家も積極的に協力してくれ、少々過剰なサービスになっているところも、この体験の自慢となっている。令和4年度には17家族66人が参加しており、約9万円の売上につながった。



写真6 棚田オーナーによる田植



写真7 野菜の収穫体験

(3) 耕作放棄地の発生防止と営農の継続

構成員である(株)稲姫会とともに、集落内の耕作放棄地を整備し、新たな放棄地の発生防止に努めるとともに、同ファーム農産物直売所「やさいの杜」で棚田米の販売を行うなど農家の所得向上につながっている。

また、高齢により耕作できなくなった農家の水田(24a)を協議会が引き継いで耕作しており、耕作放棄地の発生防止による生産基盤の保全への期待も大きい。

協議会が米の販路を確保したことにより、安定した販路ができたため、後継者の女性が米作りを継続することができた。また、棚田を耕作していた父親が亡くなり、営農が困難となったケースでは、協議会が親族(息子2人)に「協議会に作業委託すると費用もかかる。協議会がサポートするので、自分で耕作したらどうか。」などの助言を行った結果、米作りが継承されることになった。



写真8 農産物直売所「やさいの杜」



「やさいの杜」の米取扱量

稲姫米：約25tのうち、石墨棚田での栽培米は2.4t

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 良好な棚田景観の復活と周辺環境の整備

活動開始から、集落内の耕作地 2.64ha を整備したことで、石墨棚田の良好な景観が復活し、絵画のクラブや写真の同好会、俳句の同好会等の参加者たちも訪れるようになった。

大桑の会との連携では、石墨集落内の耕作地の草刈や竹林の伐採といった集落の景観保全の取組を行い、チェーンソーで切り倒した竹はチップ状に細かく破碎し、駐車場に敷き詰め、再利用するなど周辺環境の整備に努めている。



写真9 大桑の会との竹林伐採

(2) 自然環境の保全

毎年ホタルの餌となるカワニナの養殖を地元の薄根小学校に依頼し、11月に棚田でカワニナ放流会を実施している。令和3年度から、6月中旬から7月中旬にかけて、2週間ほどホタルの鑑賞会を実施し、地域住民や放流会に参加した小学生、観光客らが訪れる人気のイベントとなっている。

令和4年度には、薄根小学校の3年生2クラス（約50人）の生徒にカワニナの養殖を依頼し、ホタル鑑賞会には市内外を問わず約400人の訪問者があり、ボランティアは約40人が参加した。

また、生息環境維持・保全に努めており、ホタルの生息する用水路を整備し、地域の子どもたちを対象に自然観察会を実施している。

特に水田内に小さい水路（ヨケグロ）を設け湧水を集めたことで、1年を通して水がある環境が整い、カワニナ、ドジョウ、イモリ、ヤゴなどが生息するようになった。



写真10 生徒によるカワニナ放流

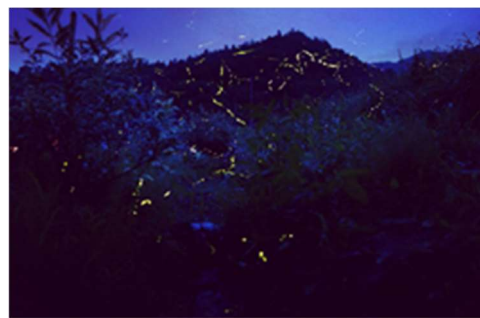


写真11 ホタル観賞会

このように棚田の生物多様性が復活してきたことから、令和4年度から地元の尾瀬高校と連携して、棚田の生き物や植物調査が進められている。

(3) 都市住民との交流の促進、コミュニティ活動の強化

棚田オーナーによる田植えや稲刈り、収穫祭といったイベントには、地元のスタッフや近所のおばあちゃんも参加するなど、交流促進の一助となっている。また、味噌づくり体験でも地元のおばあちゃんが参加して、都市住民に助言して交流を深め、体験組数は令和元年度の8組から令和4年度には58組まで増加しており、高齢農家の生きがいやモチベーションの向上にも繋がっている。



写真 12 収穫祭での餅つき



写真 13 味噌づくり体験

令和4年度には、11月20日から12月25日までイルミネーション点灯イベントを開催した際には、地元住民やボランティア、地域の小中高等学校と協力して棚田にソーラーライトを設置し、7団体の電飾を展示した。小・中学生は、ソーラーライトにそれぞれの将来の夢を描き、楽しいイベントになっている。

期間中には市内外から約500人の参加者があり、延べ40人のボランティアも参加するなど、地域コミュニティの強化に繋がった。

イルミネーション来場者の撮影した写真は、沼田市のフォトコンテストで入選となり、市の広報媒体を通じて協議会の取組がPRされることとなった。

さらに、このイベント等の活動が評価され、地元FM局の「FM・OZEハートウォーミング大賞」を受賞するなど、これらの幻想的な風景は地元の自慢である。



写真 14 棚田イルミネーション

(4) 女性の社会参画の促進、地域への定住促進

各種イベントの際の昼食づくりなどには、地区外から5名程度の女性が参加し、昼食メニュー決定の際は、費用と作る手間を巡り激論となるが、女性の意見を多く採用し、アンケートでもいつも「おいしい」と好評を得ている。

収穫体験の受け入れ農家が家族で対応するケースでは、女性が主体となって説明や参加者の作業補助を行うなど、体験事業でも女性の役割は大きい。

また、令和4年度から沼田市と連携して田舎体験ツアーを開催し、都市住民に地域住民との交流を交えながら、地域の自然資源を紹介し、継続的に地域と都市住民との関わりを広げるきっかけになっている。初年度は首都圏と県内から20人の参加、5年度は32組の参加があり、本地域への関心が高まっている。

本地域に着任した地域おこし協力隊は、任期後も地域に定住し、棚田及び地域との関係を維持するなど、地域の定住促進に繋がっている。



写真 15 協議会メンバー